

いよいよ創造神に

ついでの説明が始まります。

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 1

次に成りませる神の名は、**宇比地邇の神。次に妹須比智邇の神。次に角杙の神。次に妹角杙の神。次に意富斗能地の神。次に妹大斗乃辨の神。次に於母陀琉の神。次に妹阿夜訶志古泥の神。次に伊耶那岐の神。次に妹伊耶那美の神。**

その 332

母音・半母音

広い宇宙の一点が活動を始めて、言霊ウアワオヲエエという宇宙が次々に剖半してきたところまでお話を進めました。それらの言霊はそれぞれ頭脳の先天構造の中の実在であって、それ自体は決して現象としては姿を現すことがないものでありました。試しに母音であるウアオエ それぞれを発音してみてください。 息の続く限り「ア～」と同じ声が続きます。それは時間の上でも空間でも宇宙が無限であることを表しています。 さて今までに確認されました先天構造内の言霊ウ・アワ・オヲ・エエを主体と客体（私と貴方）に分けてみましょう。

主体側のアオエの母音と、客体側に ワヲエの半母音とが区別されます。言霊ウは 主客未剖  
 ですから 主客の区別はありません。 また 今、便宜上「主各に分けられない言霊ウを主も客もウと考  
 えて、主体側をウオアエ、客体側をウヲワエとして対立させますと 図のようになりましょう。

|   |   |
|---|---|
| ウ | ウ |
| ヲ | オ |
| ワ | ア |
| エ | エ |
| ヱ | イ |

そこでウ⇔ウ、ア⇔ワ、オ⇔ヲ、エ⇔エの 対立について考えてみましょう。 そのそれぞれは対立している、と  
 は言っても ウアオエ・ウワヲエの 一つ一つは「独り神で身を隠している」実体ですから それ自体はじつと

静まりかえっているばかりで、自分から何らの行動も起こすことが無い存在です。ウ⇔ウ、ア⇔ワ、オ⇔ヲ、  
エ⇔エの対立といっても、私と貴女の両方とも 後ろ向きに立って、目を閉じ 耳をふさぎ 互いに相手に  
全然気が付いて居ない時と同じ状態と言ってもよいでしょう。

これでは私と貴女のとの間で何の交渉も起こりようがありません。交渉がなければ何の出来事も起こり

ません。私とあなたが互いに向き合い、眼をひらけ、耳を澄まして相手に注意を払うようにするには 何  
かお互い以外のものがが必要です。そこに人間の思考構造の中の 父韻が登場することになります。

注一、この便宜上という言葉は適当ではない。 実は難しい説明を省くためである。物の見方に二つ  
ある。 相対観と絶対観である。主と客が対立し、その対立から物事の現象を考える 立場を相対

観と言う。

これに対して 主と客の対立はそのままに、その主と客が一体となっている立場（主と客統合の立場）

を 絶対観という。この場合 主客未割のウをウとウの対立として書いた事は間違いとは言い切れない。

たとえば 東と西が対立する冷戦の時代が長く続いた。これを東と西を一と考える世界全体として捉えるとき、絶対間観の立場が成立する。

その 333 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 2

その 333

古事記は <sup>とよくもの</sup>豊雲野の神 の次に<sup>うひぢに</sup>宇比地邇の神から<sup>かみ</sup>妹阿夜訶志<sup>いもあやかし</sup>古泥<sup>こね</sup>の神まで八神をあげています。

チイキシリヒニの八音の言霊のことです。この八音の言霊がウウ・アワ・オヲ・エエに対応している 母音・

半母音の宇宙に働きかけて、母音と半母音が噛み結ぶ、感応同交することを可能にします。

ウオアエ・ウヲワエ母音・半母音は人間の心がその中に生まれてくる大自然です。大自然だけでは

「独神で身を隠して」何の活動も起こりません。そこに働きかけ 母音・半母音を噛みあわせ結ばせる

八つの音は大自然ではなく、大自然を見、聞き、考え、感じ、生活を創造してゆく人間の知性の 根本

律動とも行ったら良いものです。この八つの音を父韻と呼びます。

この純粹の主体と客体を結び合わせて 現象を生んでいく八つの父韻の存在は、大昔から宗教・哲学書によって知らされてきました。例えば日本古神道では「天之御柱」純粹主体と「国之御柱」純粹客体との間を渡す天の浮橋といい、仏教では「彼岸より河岸に渡す石橋<sup>しゃくきょう</sup>」と例えられています。また易経では乾兌離震巽坎艮坤<sup>けん だり しん せん かん こん こん</sup>の 8 卦で示しておりますし、キリスト教では「我が虹を雲の内に起こさん。是我と世との間の契約の徴（しるし）なるべし」とエホバの虹という言葉で伝えています。

このように聖書も伝えますように黙って、お互いに後ろを向いている主体と客体に働きかけて、正面に向き合い、互いに気持ちを交換し合うように仕向ける人間の創造知性の働きは、神から与えられた即ち生来人間が持っている八つの父韻以外にはありません。

ではこれらの八つの父韻の言霊は、それぞれどんな働きをして主体と客体を組み結ばせるのでしょうか。

八つの父韻を指し示す指月の指である古事記の 神名の説明に入ることになります。実を言って主と客を結ぶ力動パターンなどと言いましても、心の中の奥の方で一瞬に閃く火花のようなものですので、言葉で説明表現することは至難の業なのです。けれど一度父韻の力動を知ってしまうと、古事記の太安万侶が  
実にうまい名前で実際の父韻という月を指さしたことかと感心させられるのです。

334 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 3

その 334

宇比地邇うひぢにの神

言霊チ

宇比地邇という漢字から宇（いえ）は地と比べて似て近いものだ、と言う意味が読み取れます。これだけでは神名がいかなる父韻の働きを表現しているか明らかではありません。宇比地邇の 宇は「いえ」とか宇宙の宇のことです。ここで「いえ」と云えばもちろん人間の心の家のことです。心の家は宇宙全体です  
体や物には障壁がありますが、心にはそれがありません。思ったらすぐにどこにでも、いつの時代にでも、飛ん

で行けます。ですから心の家は宇宙全体です。その宇宙が地に比べて<sup>ちか</sup>近い、というのです。天が地と比べて近いとはどんな意味なのでしょう。

もう少し突っ込んで考えてみましょう。心の宇宙といえはこころ全体です。まあそれはまた一人の人間の人格全部ということにもなりましょう。それでは地とは何でしょうか、心の宇宙が目に見えないものとすれば、地とは目に見えるもの現実的なものという意味にとれます。そこで「心全体が地に近い」とは心全体人格全体がそのまま現象となって現れ出てくること、の意味にとれます。言霊チとは宇宙全体がそのまま現象となって現れてようとする力動韻ということ。

例えば 明日大切な出来事を処理しなければならないとします。どう対処したら良いか、なかなか考え

がまとまりません。「ああでもない、こうでもない」とうとう夜中まで過ぎてしまいました。その時ふと諦めの心が湧いてきました。自分の力ではどうすることも出来ないかも知れない。それなら、その場で当たって砕けろ」そう心が決まります。この「当たって砕けろ」は決して投げやりの気持ちではありません。

成功することを念願しながらその場に臨んで自分の持てる力全部を総動員して事に当たろうという決心することです。このようになんらの先入観も持たずに、全身全霊をもって事に当たろうとする瞬時の人間の創造意志の力動、これが父韻言霊チなのです。

チ 精神宇宙全体がそのまま現象発現に向かって動き出す端緒の力動員  
その 335 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 4

その 335

いもすひぢに  
妹須比智邇の神

言霊イ

この言霊イの意味は アイウエオのイではなくヤイユエヨの意であります。 さて須比智邇の神には冠に妹が付いています。宇比地邇の神と妹背、陰・陽・作用・反作用の関係にあることを示しています。宇比地邇が宇宙全体がそのまま現象界に姿を現す韻というなら、それと陰陽・作用反作用の関係とはなる動きはどんなものなのでしょうか。

それは 言霊チの宇宙が一瞬に現象化する力動であるのに対し、言霊イは「現れ出てきた動きの持続をする働きの韻ということができます。 パツと現れたものが弥栄に伸び続く姿、と言ったらよいでしょうか。

神名を見ましょう。須比智邇は「<sup>すべ</sup>須からく<sup>ち</sup>智に比ぶるに<sup>ち</sup>邇かるべし」と読めます。宇比地邇が地に比べているのに対し須比智邇は智に比べています。その違いは 次の通りでしょう。

先の例にありますようにどう対処したらよいか思いあぐんで、下手な考え、休むに似たりと、先入観を振り切って清水の舞台から飛び降りるつもりで立ち向かう時は、一瞬大地を呑み込む姿勢でぶうかりますが、一旦飛び降りてしまえば、あと相手との交渉は自分のもっている経験的知識をどう使うか、に掛かってくる。 決意して飛び出す時が言霊チとすれば飛び出した後は言霊イです。それは否応なく自分の知恵に頼らざるを得ません。「須べからく智に比るに邇かし」の神名はそのことを指しています。

大刀を振り落とす瞬間が言霊チなら、振り落とされた太刀を持つ手がどこまでも相手に向かって伸びていく様が言霊イということです。

イ 動き出した力動が持続する韻

その 336 にづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 5

その 336

角<sup>つのく</sup>杙<sup>い</sup>の神・妹<sup>いも</sup>活<sup>いく</sup>杙<sup>く</sup>神

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>キ・ミ

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>キ・ミを指さすこの二神の名前は比較的容易に理解ができます。人間が生まれた時から授かっている天与の判断力・知恵のことを各宗教書では剣とか杖とか、また杙とか柱などと呼んでいます。

人がこの世にひとり生きて行くための頼りになる拠り代といった意味を持っています。この判断力で人が

生きるために必要な知識・信条・習慣等々を、角を出すように掻き繰って、自分の方に引き寄せてくる働

きの力が父韻キであります。

この働きとは反対に、自らの判断によって（杙）、生活をさらに発展させようと、世の中の種々のものに結びつこうとする力動 これが活杙の神である言霊ミです。

手蔓・物蔓・金蔓・人蔓手当たり次第に結びつこうする 当今の政治家気質と思えば、理解は早いでしょう。けれどこの力動は何も政治家だけのものではありません。人間にとって、このように生きて行くのに最も必要な創造意志のパターンなのです。

ミ 精神宇宙の中に己にある自己の体験内容に思いが結び付こうとする力動員  
 キ 反対に体験内容を自我の方向に掻き寄せようとする力動員  
 その 337 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 6

その 337

おほとのぢ 意富斗能地の神、いもおおとのべ 妹大斗乃弁の神

言霊シ・リ

この二つの神名から推理して言霊の内容に到達することはほとんど不可能に近いように思われます。けれど神名を元にして人が自分自身の心の内の動きを見つめていきますと、言霊の内容に行き着くのもそれ

ほど難しいこと ではありません。意富斗能地とは大いなる量りの 働きの地と読めます。

人は物事がうまく識別できないとき、ああかこうかと試行錯誤します。迷い努力した末にやっと 理解納得して、事は終わり、事態はここで一段落します。静まります。静まったのは何もかもなくなってしまったことなのではなく、経験知識として物事の識別の土台になって残ることです。 その土台が地です。意富斗能地とは大きな識別（斗）の働き（能）が土台となるように静まること、と受け取れるでしょう。言霊シ  
とは人の心の動きが心の中心に向かって静まり収まる働きの韻なのです。

大斗乃弁とおおいなる量りの、わかまえ、と読めます。言葉シとりは陰陽・作用反作用の関係にあることから考えますと、人間の識別の力（斗）が心の宇宙の広がりに向かってどこまでも活用されるように、

発展伸長していく力動韻とみることができます。また言霊りの行であるラリルレロが渦巻状・螺旋状の動き

を表すことから言霊シ・リの内容を図示しますと、螺旋のように描かれます。

- シ 精神宇宙にある精神の内容が螺旋形の中心に静まり収まる力動員
- リ シとは反対に、ある精神内容が宇宙の広がりに向かって螺旋状に発展拡大していく力動員

その 338 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 7

その 338

言葉とは正に天がどよめき稲光して、生まれた創造の言葉なのです。「太初に言あり言は神とともにあり 言は神なりき」であったのです。言葉が造られるために父韻が働きます。父韻は創造神と呼ばれるものです。とても大事です。この父韻の動きは氣の動きです。これを音共に内に自覚することです。

於<sup>おもた</sup>母<sup>る</sup>陀<sup>る</sup>琉<sup>る</sup>の神・妹<sup>い</sup>阿<sup>も</sup>夜<sup>あ</sup>訶<sup>か</sup>志<sup>し</sup>古<sup>こ</sup>泥<sup>ね</sup>の神

言<sup>こと</sup>霊<sup>たま</sup>七<sup>しち</sup>・二<sup>に</sup>

この二つの神名から容易に言霊の内容を推察できます。於母陀琉の神を日本書紀では<sup>おもた</sup>面<sup>の</sup>足<sup>のみ</sup>尊<sup>こと</sup>と書いてありますように、表面に（面）が完成する韻ということができます。

何が完成することなのか。人はその人の前で起こっている物事を的確に把握することが出来ず、思い悩むことがあります。それが何かの瞬間事情が飲み込め、どうしたことなのか表現が頭の中ではっきりと出来上がる事があります。このように物事の事態をしっかりと把握してその言葉としての表現が心の表面に完成する働きの韻、これが言霊七であります。

この言霊七と妹背の関係にあります妹阿夜訶志古泥の神が示す言霊七の内容は自ずと明らかであります。

阿夜訶志古泥とは「あやかにしこき音」の意味です。阿夜とは夜文字が使われていることから、心の表面とは反対に心中心部分を暗示しています。

心の底の部分に物事の原因となる音が煮詰まり成る韻これが言霊二であります。例を引いてみましょう、  
物事の実際の内容が理解でき、それをどう表現したらよいか、が言葉として完成し、「分かった」と思って心  
が晴れやかになった。そのとき同時に心の中心には すでに次の時代の発生する根っことなるものが、何か  
知らないが煮詰まり成っていることです。その動きにおいて前者が言霊ヒであり、後者が言霊ニの父韻であ  
るわけです。

ヒ 精神内容表現が精神宇宙球の表面に完成する韻

ニ その反対に物事の現象の種が精神宇宙の中核に煮詰まり成る韻

その 339 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 8

その 339

以上八つの父韻チイキシリヒニの内容とその指月となる古事記の神明 において お話してきました。お分かりいただけただしょうか。この父韻については先にお話ししましたように、易で 八卦といい、仏教で 石橋と呼び、キリスト教で 神と人との間の契約の虹と表徴をしてその存在に言及はしているものの、その表現はあくまで 概念的比喩的なもので、父韻の実態はここ数千年の謎とされてきたものなのです。

またここにお話しています言霊学の中でも奥義といってよい部分でありますので、読者におかれましても種々比喩で表現されます文章を参考に自分の心の中に踏み入って父韻の実際の姿を確認していただきたいものであります。

八つの父韻が理解されてきますと、人間の心の全構造の輪郭がほぼ見えてくることになります。

また次のように言うこともできます 古事記の中に出てくる幾多の神様の名前は すべて言霊の原理の内容を表徴するいわゆる指月の指でありますので、それら神様を担ぎまわり、やれご利益だ、崇敬せよ、と叫びましても、個人的に心を慰めるのに多少の役に立つかもしれませんが、それ以外何らの意味もないことでもあります。

「あれが月ですよ」と指差すその指を云々しても何も始まるものではありません。

それなら古事記神代の巻にある神名は、古事記の 編纂者である太安万侶が言霊を表徴するために創作した名前なのか、というところではありません。日本史の年表に「645年、天皇記 国記喪失」とあります。

その時代までの古代の天皇家や国家の歴史の記録が消失してしまったのですが、その写しであると言われて 民間に伝わる 竹内古文献・大友文献 やその他 上記（うえつふみ）等を見ますと、古事記の神代の巻にある 神名と同じ名前の天皇名や人の名前が多数発見されることです。

このことから 太安万侶は 言霊の一つ一つに、その内容を表徴する いわゆる 指月の指となるのに適当な名前を選び 神名として用いたに違いありません。現代に生きる私たちが 自らの心の中に踏み入れて一つ一つの言霊を確認する時、その表徴である神名がなるほどと首肯されることから、太安万侶の意図の正確さが 証明されます。

古事記の編纂者はなぜそのようなまどろっこしい謎々で言霊の原理を後世に伝えようとしたのか、その解説は後章に譲り、ひとまず八父韻の説明を終えます。

注一、 八つの父韻の確認についての参考のため、今までの説明の他に 著者の言霊学の師であった小笠原孝次氏そのまた師であった山腰明将氏（共に故人）の 発表された 父韻の説明を付け加える。

省略

その 340 につづく